神奈川

茅ヶ崎徳洲会総合病院 渡部和巨院長代行

名医の診察室

渡部和巨院長代行は胆石症などの日帰り手術におけるスペシャリストだ

スタート時の苦労と"未来"を語る

開腹せず治す

胆石日帰り手術の開拓者

"日帰り手術"―。この医療言葉は、今ではすっかり定着。実際に胆石症などで日帰り手術を受けた人も多い。今回はその「日帰り手術センター」にスタートから関わって手術を行ってきた手術のスペシャリストにスポットを当てる。

（医学ジャーナリスト・松井宏夫）

ポリープや痔核手術も

一般総合病院での日帰り手術が発展したのは米国で、1980年代のこと。手術の80～85％を占めるまでになった。

日本で日帰り手術を最初にスタートさせたのは湘南鎌倉総合病院。95年5月18日、3床で始まった。翌96年10月に「日帰り手術センター（11床）」を開設、本格化した。

96年は年間432例だった日帰り手術が、97年には1545例と約3・5倍にも伸びた。今は年間3880例に伸びている。

「胆石の手術は腹腔鏡下胆のう摘出術です。スタート時は私も湘南鎌倉にいて、胆石、胆のうポリープ、鼠径（そけい）ヘルニア、痔核（イボ痔）手術などを数多く行いました」

と、茅ヶ崎徳洲会総合病院（神奈川県茅ヶ崎市）の渡部和巨（かずなお）院長代行（54）は話す。

何かあれば集中砲火…

「当初、日帰り手術はまだ日本では市民権を得ていませんでしたから、何かあると大変です。それみたことか！と集中砲火を浴びます。だから、日帰り手術を受ける患者さんは、自宅と病院を車で30分が基本でした。手術後、患者さんから具合が良くないという電話が入ろうものなら、すぐに飛んで行きました」

もちろん、日帰りを患者に強いるものではない。高齢の方は1泊、2泊するケースも多い。そんな中、渡部院長代行は今年、ある50代の男性患者の行動に驚かされた。

「マッサージを仕事にされていて、筋膜隆々の患者さんでした。『ジムでのトレーニングは退院1週間後にしてください』と強く念を押しておいたのに、手術の翌日にジムへ。これにはびっくりしました」

90年に日本で初めて行われた体にやさしい腹腔鏡手術が、ついにここまで進化した。今や、胆のう摘出手術＝腹腔鏡手術である。それでも、腹腔鏡手術の途中で開腹に移行することが1％程度ではあるが起こる。

進化遂げた腹腔鏡手術

「手術前の予想とは違って炎症の強いケースがあります。その場合は術前に説明しておいたように、ためらわずに開腹します。粘っても意味はありません」

もちろん、開腹といっても5㌢程度である。的確な判断は経験のなせるところ。

渡部院長代行は85年旭川医大卒後、すぐに茅ヶ崎徳洲会総合病院へ。今は湘南鎌倉総合病院と掛け持ちで手術に奔走する。

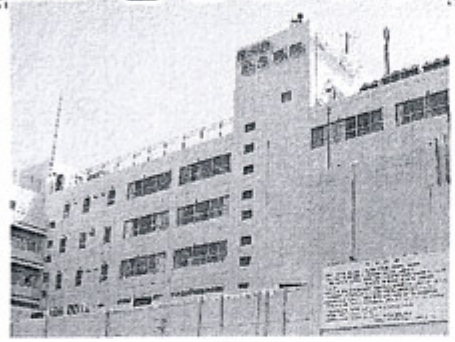
「2005年前後3年間は毎年1000例を超える手術をしていました。今は年間350例です。後輩を育成しなければなりませんから…」

加えて、病院経営の仕事も多忙を極める。今年10月1日、茅ヶ崎徳洲会総合病院は隣のJR辻堂駅北口に移転し、湘南藤沢徳洲会病院となる。総床面積1万2000坪、419床、手術室12室。

「世界で初めてのCTナビゲーションの脊椎手術室、前立腺がんのロボット手術、神奈川初の高度放射線医療機器IMSRTの導入、日本初の胎児治療室もでき、遺伝相談室もできます。院長代行として胎児、新生児の治療に対してもしっかり頑張ります」

渡部院長代行は自身をも叱咤しているようだった。

今秋、世界初の機材備えた新病院へ



神奈川県茅ヶ崎市にある「茅ヶ崎徳洲会総合病院」

胆石症

胆石は胆のうや胆管にできる結石で、大きく①「コレステロール結石」②「ビリルビン結石」③「混合結石」の3種類に分けられる。①は胆汁の主成分のコレステロールが結晶化したもの。②は胆汁の色素成分のビリルビンが固まったもの。③は①と②の混じった石。今はコレステロール結石が多くなっている。その理由は「食事の欧米化」と「朝食を抜く不規則な食生活」である。

このほか、胆石のできやすい人の特徴もある。それは「4つのF」。Fから始まる4つとは、①Fine（元気）、②Fatty（体格がよい）、③Forty（40歳以上）、④Female（女性）。つまり、「元気で体格がよい40歳以上の女性」ということ。女性の多さは男女比1対2である。日本人では成人の10人に1人が胆石持ちと推測されている。

胆石があっても無症状の人は70～80％、症状の仙痛（せんつう）と表現される激痛の発作を起こす人は20～30％。発作を繰り返すようであれば治療が勧められる。

胆のうにある結石の基本的な治療は、腹腔鏡下胆のう摘出術である。